

交換留学報告書

* この報告書に記載される内容は多文化社会学部のウェブサイト等に記載いたしますので、予めご了承ください。

氏名	オウ コウケン	学年(渡航時)	3 年
派遣先大学	台湾大学		
国・地域	台湾		
派遣期間	2025 年 8 月	～	2025 年 12 月

履修科目

1 学期目	
履修科目	授業内容
古典社会學理論(中国語開講科目)	社会学の理論を全般的に教える授業
当代台灣社会(英語開講科目)	当代台湾社会の社会問題について教える授業、発表あり
正義の理論と実践(英語開講科目)	功利主義、自由意志主義、義務論、目的論の視点から正義を討論する授業、ディスカッションあり
政治社会学(英語開講科目)	政府、戦争、民主制という3つの政治社会学の分野の理論を教える授業、ディスカッションあり
社会統計(中国語開講科目)	統計学の入門知識と STATA というプログラミングの知識を教える授業

留学レポート(1,500 字以上)
私は大学三年次後期に、台湾の台湾大学へ一学期間の交換留学を行った。名目上は一学期間であったが、実際の滞在期間は約四か月と比較的短く、時間は非常に早く過ぎたように感じられる。しかし、その短い期間の中でも、学業面・生活面の双方において多くの貴重な経験を得ることができ、強く印象に残る留学生活となった。本報告書では、その概要について述べたい。
まず、学業面についてである。台湾大学は台湾を代表する最高学府であり、学術水準が非常に高く、履修した授業はいずれも難度が高かった。また、学生の学習意欲も高く、全体として非常に刺激的な学習環境であった。台湾大学は国際化が進んでおり、特に社会学系の授業では、およそ半数が英語で開講されている。私は中国語を使用できるため、中国語開講科目と英語開講科目の双方を履修することができた。
実際に授業を受けてみると、言語によって授業の雰囲気や構成に違いがあることを実感した。英語開講の授業では留学生の割合が高く、国際的な視点からの議論が多くあった。一方、中国語開講の授業では台湾人学生を中心であり、内容もより専門的で、理論理解や読解力が強く求められた。個人的には、中国語で開講される授業の方が全体的に難度が高いと感じた。
台湾大学での学習スタイルは、日本での大学生活とは大きく異なっていた。ほとんどの授業で毎週大量の文献を読む必要があり、さらにディスカッションやレポート課題も多く、非常に忙しい日々であった。留学当初はその負担の大きさに戸惑ったが、次第に慣れるにつれて、文献読解力や論理的思考力が向上していることを実感できた。学習面においては、非常に充実した留学であったと感じている。
次に、日常生活について述べる。中国語での会話が可能であったため、生活上の大きな不便はほとんどなかった。台湾の人々は総じて親切で、困ったことがあれば見知らぬ人であっても丁寧に助けてくれることが多く、安心して生活することができた。食事に関しては、台湾料理は非常に美味しい一方で、全体的に味付けが甘く、量がやや少ないと感じた。物価は日本よりも安いが、日本料理店の価格は日本より高い点が印象的であった。
気候について触れておきたい。到着した八月末は連日晴天で非常に暑かったが、その後二か月ほど雨が続き、長期間の曇天は精神面にも少なからず影響を与えた。しかし、最後の一ヶ月は雨が減り、快適に過ごすこと

ができた。台湾は年間を通して温暖であり、十二月でも半袖で過ごせる日が多く、厚手の防寒着はあまり必要ななかった。

観光については、学業が多忙であったため十分な時間を確保することは難しかったが、空いた時間を利用していくつかの場所を訪れた。特に印象に残っているのは台湾南部の墾丁であり、台湾最南端から太平洋を望む景色は非常に美しく、強い感動を覚えた。

滞在中は大学の学生寮に居住した。四人部屋で個人の空間は限られていたが、学期あたりの費用が約五万円と非常に安く、経済的な負担は少なかった。また、共同生活を通じてルームメイトとの交流が深まり、良い人間関係を築くことができた点も大きな収穫であった。台北市内の交通は非常に便利で、地下鉄やバスが充実しており、タクシーやシェアサイクルも利用しやすかった。

以上のように、台湾大学での四ヶ月間の留学生活は、学業面・生活面の両方において非常に有意義なものであった。学習意欲が高く、主体的に学びたい学生にとって、台湾大学は非常に適した交換留学先であると考える。

留学中の写真(5枚程度) ※写真のキャプションも入れること



垦丁の風景



午後の大学の図書館前



ある雨の日、寮の窓の外



最後日に社会学部前で写真を撮った私



年に一度の LGBT のパレード